▼シリーズ「CNCP 設立 10 周年を迎えて」

「CNCP 通信」編集活動を振り返って

シビル NPO 連携プラットフォーム 会員
有岡 正樹

2014 年４月に NPO 法人「シビル NPO 連携プラットフォーム（CNCP）」が発足し、それから丁度 10 年が経ちました。土木学会の「成熟したシビルエンジニア活性化小委員会」で検討の結果、本 NPO 法人立ち上げに至る経緯は、当時の委員長である駒田智久氏から別途投稿されると聞いています。

筆者は、さらにその３年前の 2011 年３月に発生した東日本大震災に関連して、NPO 法人「社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会（SLIM Japan）」の理事長として研究会を立ち上げ、津波がれき処理構想「3.11 グリーンヒル」を検討、提言活動に意を尽くしていました。その時の経験で、いち NPO 組織が孤軍奮闘でその広大な構想の実務に関われるはずもないと自認していた筆者は、土木学会の小委員会に参加し、検討している組織が多くの NPO 法人を会員とする中間支援組織（シビル NPO 連携プラットフォーム）であることを前提に、その具体化を議論したのを憶えています。震災復旧の多事多難な時期に全力を尽くされた第 99 代土木学会会長山本卓朗氏に、本 NPO 法人の代表理事就任をお願いすることに至ったという背景があります。

発足時の法人正会員（NPO 法人）14（10）、個人正会員 13（26）、賛助会員 12（30）の計 38（66）（カッコ内は 2024 年３月現在）となっています。ここでは、筆者がサービス提供部門長として特に前半強く関わっていた広報誌「CNCP 通信」について、誌ごとの規模や投稿意見の内容分類などについて振り返っておきたいと思います。

1．通信 120 巻の記事投稿の内訳

CNCP 発足３年を過ぎて４年目に入ると NPO 法人活動も本格化しだし、CNCP 通信にも毎月 10 件前後の事業提案を含む記事が掲載されだしましたが、浅く広くの感が否めず、２期４年後を目指して 2017 年には運営委員会の中に見直しワーキングが立ち上げられ、11 月の集中討議を挟んで翌 2018 年の３月まで議論が続きました。その後もいくつかの運営施策の変化やコロナ禍も相まって、10 年の CNCP 法人活動と CNCP 通信展開の推移を大きく次の４段階に分けて考察してみます。

⑴ 事業試行期：2014 年４月～2018 年６月の約４年で Vol. 1～50 号
⑵ 事業変革期：2018 年４月から５年目に入っての事業の見直しに基づく最盛期。2020 年夏ごろから、コロナ感染拡大に伴う活動制限が厳しくなり始める９月までの約２年半で Vol. 51～78 号
⑶ コロナ禍まん延のアウトバックな事業期間：2020 年 11 月から、コロナ拡大収束の 2023 年３月までの２年半で、Vol. 79～107 号ですが、この期間については比較の対象としません。
⑷ コロナ感染減少による事業再興開始期間：2023 年３月ごろからコロナ感染が低下しだしたこと（制度的には感染法上２類からから５類に格下げは５月８日）を受けて、面談等が復活し始める４月からの現 2024 年３月までの１年間で Vol. 108～119 号

これらのうち⑶を除く⑴、⑵、⑷の３つの期間毎の月数、ページ数および記事数、更には、投稿者の種別などを、それぞれの期間の平均値として集計し、次ページの表－１にまとめて比較しました。

これによると最終ページの事務局通信を除いて、いずれも月平均 10 ページ前後ですが、記事数においては第４段階で半減しています。一方、第２段階までとコロナ禍後の第４段階とでは、ひと月当たりの記事数半減、記事当たり平均ページ数は倍増といった明らかな差がみられます。また、執筆者の性別や個人・グループ比較では、女性やグループの比率が倍増しており、第４段階はまだ１年の途上ですが、新しい取り組みが動き出していると見ることができます。ただ、第３段階での CNCP 通信は、事務局のメールアドレスが変更されたためか、毎月配信されるも気づかなかった会員が多かったようで、いわばブラックボックスとして筆者も含めて関心がそれまでとは劣後していたのかも知れません。

表－1　段階ごとの通信記事投稿内訳比較

段階	期間	月数 (Vol No)	ページ数 (頁/月)	記事数 (記事数/月)	ページ数 /記事	執筆者 グループ (比率%)	執筆者 男性 (比率%)	執筆者 女性 (比率%)	備考 管理者
(1)	2014.5 ～2018.6	50 (Vol.1～50)	9.2	7.2	1.3	1.7 (24)	5.0 (69)	0.5 (7)	内藤 有岡
(2)	2018.7 ～2020.10	28 (Vol.51～78)	11.3	7.0	1.6	0.7 (10)	5.6 (81)	0.7 (9)	内藤 有岡 妹尾
(4)	2023.4 ～2024.3	12 (Vol.108～119)	8.4	3.6	2.3	0.8 (23)	2.1 (58)	0.7 (19)	田中

内藤賢一前事務局長には、上表備考欄に示すように CNCP 通信の管理者として多大な尽力を傾けてこられましたが、2021 年６月に逝去されました。改めてご冥福をお祈りいたします。

2．「話題」のアーカイブ化

投稿された「話題」は、1．で述べたその投稿数や文量だけでなくその内容がきわめて重要だと考えています。その話題ごとの内容を「アーカイブ化」と称して以下の９項目で分類、集計し、上述の(1)、(2)、(4)の３段階にまとめたものが表－２です。赤字は、通信 Vol.39 でその整理の仕方を初めて公表した際の項目（黒字）に、逐次追加していった内容です。

a. インフラメンテ・更新、アセットマネジメント
b. 教育研修、セミナー・出版、意見交換等
c. 災害、防災・減災、復旧・復興、危機管理、環境、エネルギー
d. ＮＰＯファイナンス、PFI/PPP、リスクマネジメント
e. 地域社会（まちづくり、協働・連携、地域組織等）
f. 国際化(国内外)、海外情報
g. シビル NPO の現況と課題(技術・人材・制度等)
h. 人文、地理、歴史、風土・景観
i. その他（随想、経済・社会、政治、文化、IT、未来）

表－２ CNCP 通信の「記事」の内容アーカイブ化結果（全 119 号）

段階	Vol. (発行回数)	投稿記事数	投稿文の主たる内容分野									記事の関連内容数	記事の内容間関連率
			a	b	c	d	e	f	g	h	i		
			インフラ メンテ 更新 各種土木施設	教育研修 セミナー 出版･表彰 WS等	災害 防災・減災 危機管理 環境 エネルギー	NPO ファイナンス PFI/PPP リスクMG	地域社会 (まちづくり、協働・連携、地域組、都市・地域計画)	国際化 (インバウンド・アウトバウンド) 海外情報	(シビル) NPOの 現況と課題 (技術・人材・制度等)	人文 地理 歴史 風土・景観	その他 (随想、経済・社会、政治文化、IT、未来)		
(1)	1～50 (50)	362	45 (11)	51 (12)	27 (8)	22 (5)	84 (20)	26 (6)	119 (28)	22 (5)	32 (7)	428 (100)	1.18
(2)	51～78 (28)	196	40(13)	42(14)	37(12)	8(3)	50(16)	13(4)	51(17)	52(17)	16(5)	309 (101)	1.57
(4)	108～119 (12)	43	8(13)	12(20)	7(12)	0(0)	11(18)	2(3)	7(12)	8(13)	5(8)	60 (99)	1.40
計		601	93(12)	105(13)	71(9)	30(4)	145(18)	41(5)	177(22)	82(10)	53(7)	797 (100)	1.33

第１段階では、Vol.1～50 として分析したように 10 カ月単位で取りまとめたものを、CNCP 通信に何回か事務局として報告してきました。今回の 10 年間の「CNCP」NPO 法人活動の中でも、CNCP 通信は広報活動だけでなく、その活動に関わる会員やサポーター等が社会貢献での「存在感」を互いに共有しながら、具体的な「達成感」を披露する場でもあると考えてきました。そしてそれらが相乗しながら次の段階へアップグレードしていくためには、一つひとつの記事が一瞬の「微分値」で終わるのではなく、それらが積み重なって「積分値」となり、活動そのものが変革していくことを志向していました。その一つの手段が、記事の分析とそれに基づき類似の事象を束ねていくプロセスです。

1．では、一つの「記事」を１件として統計処理しましたが、ここではその記事の主張しようとしている内容がどういう項目に分類されるかが重要となります。例えば、Vol.50 のシドニー視察旅行記(7)「シ

ドニーハーバートンネル」（CNCP サポーター）は、f. 国際化、a. インフラメンテ、d. ファイナンスの３項目が内容として該当することになり、記事は１つでも内容的には３項目として計上されることになります。表－２の右端欄の「記事の関連内容数」と「関連率」がそれを表していますが、上述のように第４段階の記事は一件当たりの文量が多く、内容的にもいくつかの項目にまたがることを示しています。

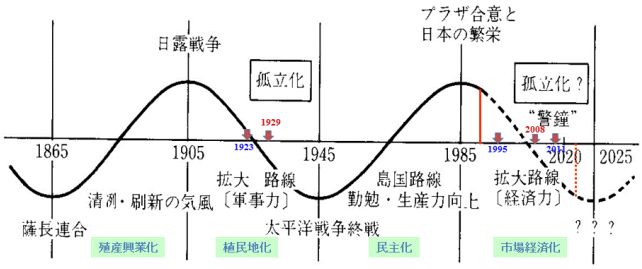
第４段階の内容として. 山本代表理事が昨年および今年の年頭あいさつで提案の「適疎な地域づくり」といった e. 地域づくりに分類されるテーマの割合が突出していないのは気になりますが、まだ新しい段階に入って約１年です。様々な議論とその成果が次々と CNCP 通信の記事となり、積分されることを期待しています。

３．雑感

筆者は 4 年で常務理事兼サービス提供部門長を辞退し、その後、連絡調整会議のコーディネーター実務に専念することになりました。それらに関連して筆者自身の個人的な取り組みを振り返って余白を埋めたいと思います。

(1)日本近代史 80 年周期説～偶然の重なり～

2018 年 CNCP 通信 Vol.50 の明治 150 年企画特集（10）に「10 年後の『明治 160 年』に思いを寄せて」と題して、日本は右図－１にもあるように、明治維新（1965 薩長連合・江戸幕府崩壊）、日露戦争勝利（1905 世界列強の仲間入り）、太平洋戦争敗戦（1945 広島・長崎原爆投下）、そしてプラザ合意（1985 円の自由化、Japan as No.1）という重要な歴史的事象を契機に、80 年周期で「禍福」あざなう歴史を歩んできたことを書きながら、あと７年で日本の国力は「禍」の側に振り切れるのではとのリスクを再認しました。その仮説の背景には多くの「負」の事象が偶然として重なることになりますが、その一つが 2020 年初頭に始まるコロナ禍ではと危惧し、CNCP 活動を中断しそのリスクに目を向けていくことに意を決した経緯があります。CNCP 通信のアーカイブ化も内藤事務局長（当時）に託し、それには関与しないことになりましたが、コロナ禍が落ち着きだした 2023 年４月の Vol.108 以降今日まで、12 ヵ月分の通信に初めて目を通しながらアーカイブ化し、今回の 10 周年記念誌に追記した次第です。



図－１　日本近代史における 80 年周期図

(2)コロナ禍対応～心をよぎる５つの不安～

前述の第２段階の終わりである 2020 年７月発刊の CNCP 通信 Vol.75 において、緊急企画紙上ワークショップと題して“社会や暮らしの変化”と“シビル NPO の役割”の両面での意見が募られました。３ヵ月後 17 名の会員やサポーターなどからの計 58 の意見が「With コロナのシビル NPO」と題して整理されて、Vol.78 で５ページにわたって掲載されました。その後第３段階のブラックボックスに入っていくので、それらの意見交換どのような進展をしたのか定かでありません。

筆者としては、日本のコロナ禍に対応する法的規制・支援が徐々に政策化され出した３月から、豪州や NZ の仲間とも意見調整をしながら、独自の調査・研究を詳細化し始めました。それらがある程度方向性を見せ始めた５月頃からその結果を文書化して、CNCP をはじめ筆者の関わる NPO 法人、他の研究会メンバーさらには同級生等にメール送付して意見を求めました。それらは「ポスト・コロナ定期便」として計 30 便を超える量に至っています。それらの便は適時再整理されましたが、最初のコロナ感染拡大第１波～第３波についての研究経過を、４回連続で CNCP 通信 Vol.40～43 に投稿しました。その最後の便には、「まとめに代えて～心をよぎる５つの不安～」と題して補遺を合わせて添付し、CNCP 会員らとの意見交換を求めましたが、ブラックボックス期間でもあるという「負」の偶然の重なりもあって、意が通じなかったのは、今もなお悔やまれる事象でした。

４．あとがき

第２段階までは CNCP 通信の担当者として議事内容のアーカイブ化にも関わり、その定量的評価を含め対応できましたが、後半は筆者にとっては未知のコロナによる空白の 30 ヵ月と新しい視点での活動展開でもあって、十分な評価ができていません。事務局によると４月から、CNCP 通信の「検索システム」が運用開始になるとのことで、第４段階が右肩上がりに一層進展することを期待したいと思います。